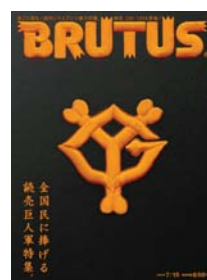
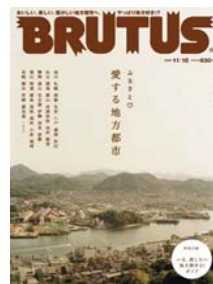


西田構成員資料

BRUTUS®

1980年創刊
隔週誌→年23冊
毎月1日・15日
価格帯500～700円
10代～50代の男性70%・女性30%





特集 音とことばで育む～ラジオの未来

新ラジオデイズ

～リスナーの生活に密着したラジオの現場から～

第57回民間放送全国大会シンポから



第57回民間放送全国大会のシンポジウム①テレビ、②ラジオが2009年10月27日、東京・有楽町の東京国際フォーラムで行われた。ラジオをテーマにしたシンポジウム②のタイトルは「新ラジオデイズ―リスナーの生活に密着したラジオの現場から―」。コーディネーターはラジオファンとして知られる西田善太『ブルータス』編集長。各地でリスナーから絶大な人気を集める青山高治（中国放送）、采野吉洋（南日本放送）、喜瀬ひろし（STVラジオ）、BUTCH（エフエム福岡）のパーソナリティ4人を招きラジオの魅力と将来を熱く語り合った。

西田 雑誌『ブルータス』では、今年2月にラジオを特集しました。題して「なにしろラジオ好きなもの」。この4～5年、私はラジオを聴き直しています。そこで、その面白さを何とか伝えられないか―そんな想いから組んだ特集です。

予想をはるかに上回る売れ行きで、1万部の増刷をかけた。リスナーから書店に注文が殺到したんです。その後もいろいろな方がこの特集を語ってくださり、そこからラジオ局の方々と縁ができ、コーディネーターを務めさせていただくことになりました。

私自身もラジオ番組に出演経験がありますが、ラジオには雑誌やテレビにはないものがあると思います。作り手と演者の距離がテレビより近いということ。瞬発力や、その場で「やり切った」という快感。何より、生放送によつてリスナーと直につながっている密着感。この「密着感」を最も表しているのが地方民放局の人気番組ではないでしょうか。

で番組をすることになった」という前提でプレゼンテーションいただくところから始めてみたい。

まず、中国放送『秘密の音園』の青山高治さんからお願いたします。

人気タレントには頼らない

青山（番組の一部試聴に続いて）毎週火曜（金曜の夜9時50分から2時間、生放送で送りしている『秘密の音園』には、広島県内たくさんの中高校生から生の声やメールが届きます。

「青山さん、こんばんわ。中間テストやつと終わりました、長かったです。きょうは思いっきり弾けようと思って友達とカラオケに行ってきました（広島出身の）Perfume（パフューム）を歌って踊りまくってきました。なのでPerfumeの曲、リクエストさせてください」

こんなメールを僕が読んでいるその裏で、実は全国ネットのFMにPerfumeがゲスト出演していたりする。

ローカル局は有名なゲストに頼ることができません。自力で全国的な人気者を呼ぶこともできない。頼れないなら、頼らないつくり方をします。スタッフは「うちのパーソナリ

ラジオは「時間のモデル」でもある。1時間の番組は10分で早聴きできない。1時間丸ごと聴かなければ分からない。早送りできるテレビや早読みできる雑誌と明らかに違う。

雑誌には全国誌、関東圏、関西圏などエリア対象のリージョナル誌、さらにタウン誌にあたる地方の雑誌に大別できます。北九州市の『雲のうえ』や倉敷の『Kashi Japan（クラッシュジャパン）』の2誌は、全国誌より面白く定評がある。インターネットの普及で全国的なものが売れると思っていると、実は大間違い。地方色・ローカル性って、メディアにすごく大きなヒントになる。

今回のシンポジウムには、全国各地でリスナーから高い支持を集める人気番組のパーソナリティ4人を招きました。といっても、皆さんから「地方はいいよ」と話してもらってもありきたりです。そこで「地元密着」というキーワードを一度忘れ、4人の方が「東京キー局にスカウトされたら」「全国ネット

ティを何があっても有名にしよう」と、そして「リスナーが一瞬でも主役になれるようなコーナーを」と心がけています。ローカル局で最も大切なのは「魂」。全国の方々をリスナーにして、その人たちの主役になりたい。時間も守ります。放送事故も起こしません（笑）。格安でつくりまします。人気歌手が呼べないならリスナーが歌います！

西田 番組のPRメモには「ラジオの面白がり方を中高生に知ってほしい」とあります。いまの中高生ってラジオを聴いてないんじゃないか。私もそう思っていました。もう少しで説明いただけませんか。

パネリスト

青山 高治氏
（中国放送アナウンサー）

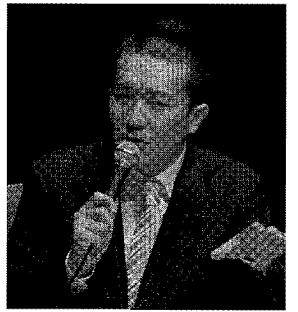
采野 吉洋氏
（南日本放送アナウンサー）

喜瀬ひろし氏
（STVラジオパーソナリティ）

BUTCH氏
（エフエム福岡パーソナリティ）

西田 善太氏
（『ブルータス』編集長）

コーディネーター



青山 高治氏(あおやま・たかはる)

1972年広島県尾道市生まれ。広島修道大学卒業。94年中国放送入社。2001年から録音番組『秘密の音園』を担当、2時間の生ワイドに育て、広島の中高生の兄貴分として絶大な人気を築いている。同番組で2008年第45回ギャラクシー賞ラジオ部門DJパーソナリティ賞を受賞。

中国放送 (RCCラジオ) 『秘密の音園』

火～金 21:50～23:50

2001年4月、20分の録音番組としてスタートした音楽バラエティ。04年8月、2時間の生ワイド番組に昇格。06年2月から公式ブログ開設。このブログを通じてポッドキャストも展開。番組グッズは「謎の音園グッズ」と呼ばれ現在第9弾までシリーズ化。番組オリジナルキャラクターは漫画家しりあがり寿によるデザイン。
<http://blog.rcc.jp/radio/otozono/>

青山 中高生の部屋にはたいていコンポがあります。でも、ラジオチューナーが付いていることを持ち主人すら把握していないのが現実ではないでしょうか。コンポの横にはD SiやPSP、ケータイやパソコン。さらに一部屋に一台テレビがある。そんな環境で、あえてラジオを選んでもらわねばならない。

彼らにいまラジオを聴いてもらわなければ、数年後・数十年後にラジオを聴く人は確実に少なくなっていく、いや、いなくなるのではないか。だからこそ、いまのうちにラジオを聴く楽しみ、ラジオの面白がり方をこの番組から見つけてくれたらいいな、と。

西田 冒頭で紹介した『ブルータス』のラジオ特集では、在京民放ラジオ8社のご協力で、

リスナーの想像力をお手伝い

西田 次は南日本放送『うねうねWeekend』の采野吉洋さんです。

采野 (番組の一部試聴に続いて) お聴きいただいたのは土曜日午前11時から生放送している『うねうねWeekend』の川柳コーナーの

は台風銀座で災害が多い。災害時に鹿児島の人たちが何を頼りにするかといえば、ラジオだけ。停電になるとテレビは見られなくなりすからね。

私たちは番組を通じてふだんから信頼関係を築いています。そんなパーソナリティがきちんと台風情報や生活情報を伝えてくれる。そこにすごく安心されるのだと思います。

西田 次はSTVラジオ『オハヨー!ほっかいどう』の喜瀬ひろしさんをお願いします。

喜瀬 (番組の一部試聴に続いて) 『オハヨー!ほっかいどう』は月曜からの1週間番組。週の後半が62歳の私、前半は69歳のパーソナリティがマイクに向かっていきます。それだけで「この歳で元気にがんばってるんだから、ラジオの前の皆さん方もがんばりましょうよ」ということがお分かりいただけるのではないのでしょうか。

お聴きいただいたのは8月末に行われた北海道マラソンに私が出場し、完走した翌朝の放送です。私はこれまでに海外7回、国内を含めると11回ほどのフルマラソンに参加してきました。リスナーの方々と一緒に走ったり、ツアー中に電話リポートを入れたりしながら、「この歳ですがマラソンも放送もがんばっています」と伝えてきたつもりです。
1ランナーであると同時に、半分冗談です

が私は「歌手」でもあります(笑)。これまでに5枚のレコードとCDを発売しています。勝手につくったキャッチフレーズは「歌ってしゃべって走れるアナウンサー」。

西田 番組は何年続いているんですか。

喜瀬 私の『オハヨー!ほっかいどう』は2年です。昼間の『ときめきワイド』を23年続け、早朝に変わってから2年になります。

西田 取材メモの中に「ラジオネームは大嫌い。ラジオをお聴きの皆さん」で通している」という言葉がありますが、その心は?

喜瀬 ラジオって想像の世界。少しでもそれを手助けしなくちゃいけない。例えば「匿名希望のウン歳の女性の方からいただいたお話です」って言えば、「こんな人が、こんなお話を寄せてくれたんだ」と、それだけである程度想像できます。なのに、「ラジオネーム『ネコの名はコユキ』さん」からシリアスな話を寄せていただいても、よく分からないんです。リスナーの想像を手助けしなくちゃいけないのに、ラジオネームはそのきつかけを奪っちゃってる気がして。なので、私は「ラジオをお聴きの皆さん」と、ラジオネームをできるだけ使わないようにしています。

西田 最後は「ブチカン」ことエフエム福岡『BUTCH COUNTDOWN RADIO』のBUTCHさんです。

抜粋です。鹿児島弁はお分かりになりましたか? 「僕もETCを使ってドライブに行ってみたもののだなあ」という意味です。鹿児島弁は難しい。かくいう私も、実は鹿児島出身ではない。滋賀県大津市の出身なんです。小さいころから人を笑わせるのが好きでした。中学生になってラジオの深夜放送と出会い、それがきっかけでアナウンサーという職業を選びました。ラジオを聴いてくださる皆さんとのやりとりの中から生まれる笑いを大切にしてきたつもりです。全国ネット番組をやらせていただけるなら、それをスケールアップしていきたい。番組では毎回、テーマを設定して皆さんの意見をうかがっています。それが、九州以外の地域はどうなんだろう? そこに興味があります。それを発掘してみたい。

主役はあくまでリスナー。おハガキやお便りの中から笑いを生み出していきたい。その方の人生や地域での暮らしぶり、地域の様子も透けて見えるかもしれない。東京を含む全国の地方人となりがっていきいたいと思います。

西田 「地方のラジオは強い信頼関係でリスナーと結ばれている」とディレクターの方からのメッセージ。「信頼関係」とは具体的に?

采野 防災という観点から考えると、鹿児島

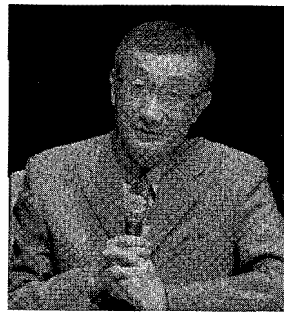
「音」には無限の可能性が

BUTCH (番組の一部試聴に続いて) 僕らの場合、AMラジオとの差別化をまず念頭に置いて、番組を「バラエティカウントダウンレディオショー」にしたかった。

もともと私は役者上がりで、飲み屋の世界を10年ほどやったり、生身の人間を相手にするところから始まった。だから、既成概念にとらわれずラジオの可能性をどれだけ広げていけるかということが出発点です。

映像がないことをマイナスと捉えない。音楽やSEを発信し、それを聴いたリスナーの皆さんそれぞれがイメージしてくれることが、逆に強みだと考えました。

おいしいお店を紹介するコーナーを15年近くやっています。1軒の店を15分ぐらいしゃべる。そのために、取材はみっちりやります。しかもノンアポで。必ず僕とディレクター、プロデューサーの3人で行く。その際、取材とは言わず、普通のお客さんと同じようにひととおりのメニューを頼む。3人が「これオッケーじゃん」と思ったときしか取材しない。「ダメだ」と思ったら、それまでの飲み食い代は全部自腹で払って帰る。しかもオンエアが終わったとき文句までつける。「いい店



喜瀬 ひろし 氏(きせ・ひろし)

1947年函館生まれ東京育ち。70年札幌テレビ放送入社。以来アナウンサー生活39年。現在早朝のラジオ生放送『オハヨー!ほっかいどう』とテレビショッピング『喜瀬ひろしのこれは五つ星』を担当。STVラジオ所属のサラリーマンとアルバイトの小商いで二足のわらじ中。モットーは「声は人なり!」

STVラジオ 『オハヨー!ほっかいどう』

月～金 5:30～9:00

朝5時30分スタートの生放送、北海道で四半世紀続く長寿番組。でも私は担当して2年たらず。ニュース・新聞からあらゆることを伝えますが、うれしいのは美味も満載のところ。そうでもない朝3時半には起きられません。

歌に自信のある中高生が電話口でアカペラで歌って勝ち抜いていく人気コーナを2時間の公開生放送にして、大盛況でした。番組でこのコーナーを始める前は、「果たして電話で、しかもアカペラで歌ってくれるだろうか」って。ところが始めてみると、いまや順番待ち状態。リスナーが一緒につくってくれる。テレビじゃできないけど、ラジオならできる。素人の2時間カラオケ大会なんて東京じゃ放送されてくれませんよね。西田 番組では、出ている子どもたちの学校名なども普通に放送されていますね。青山 学校名や地名は、あえて意識して言うようにしています。聴いていて頭の中に地図みたいなものができると思うから。「あそこ

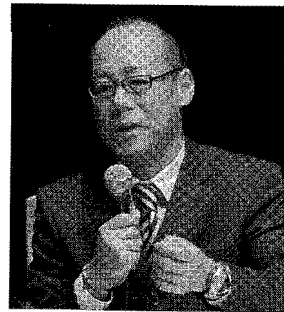
の高校はいま修学旅行に行ってるんだ」とか「あっちの学校って中間テストなんだ、ウチはもう終わったのに」と。地名や学校名を出すことで、リスナーの頭の中に地図がつくれば、それが生活感につながる。そういう距離感を大切にしたいですね。西田 采野さんは滋賀出身で鹿児島でやられている。なぜ鹿児島をそこまで愛したか。采野 「鹿児島でなくてもいいんじゃない」と言われればそのとおり。でも、根が関西人ですから、逆に「東京がなんぼのもんじゃない」と。私をアナウンサーやパーソナリティとして育ててくれたのが鹿児島。その皆さんに恩返ししたい。リスナーも僕も一緒に育ち、育てられてきた。ようやく実りの季節を迎え

たのに、それを全部うつぶらかってわざわざ東京に出ていく必要はないでしょう。東京でできることは鹿児島でもできる。でも、東京じゃないことが鹿児島ではできます。鹿児島では木の葉を食べるんだそうです。すごく苦くて、葉にしたり焼酎の当てにするようなんです。ところが私にはどんな木の葉だか分からない。そこで番組で問いかけてみたら、皆さんが写真を送ってくれました。で、番組の終了間際に警備員室から「リスナーの方から届け物があります」と。スタッフが取りにいくと、タッパーに入った木の葉のおひたし。わざわざつくって届けてくださった。放送では紹介できませんでしたが、みんなで試食しました。たいへんまずい、ムチャクチャまずい(笑)。でも、届けてくれた方の愛情に感動しました。私やMBCラジオとリスナーの間にきちんとした関係ができていなければ、こんなことはありえない。こうしたご近所付き合いって、東京のラジオでは無理じゃないでしょうか。西田 出版の世界でも、地元をよく知るだけでは本はつくれないといわれます。外からの視線が必要。「出身ではない」ということが、うまく効いているのでしょうか。采野 鹿児島弁も難しいですよ。27年いいますが、まだしゃべれない。本音はつい関西弁に

なんだけど、もうちょっとこうしてもらった方がいいよね」と。でも、そういうことで信頼関係が築ける。最初から「取材」で行くと、その日はおいしい料理を出すけど、番組で紹介したらおいしくないものしか出てこない。「番組で紹介されたから行ったのに、なんだよ、あれ」ってことになる。すると、その後はまったく信用してもらえませんか。そのかわり取材は徹底的にやります。これが強みでしょうか。自分の番組ではありませんが、同じスタッフでテールマジックやイリュージョンの番組もやっています。ラジオで、ですよ。「バカじゃないの」って思うかもしれない(笑)。でも、インターネットカメラとリンクさせることで、逆にイメージがふくらむ。入っているんです。次に考えてるのは不動産コーナー。「こんなステキな部屋があります」。これをラジオでやれないか。そんな暴れん坊番組でいたい。面白がつてやっていると、アーティストやミュージシャンとの付き合いも密になる。「来てよ」って言うのと「分かった」。そんな関係性も築けるようになりました。ラジオ表現の可能性を広げていく発想にこだわりたい。福岡という地域に密着するのはもちろんのこと、福岡を東京に変えちゃえば

いいだけの話なんで、面白いことができると思っています。西田 BUTCHさんの番組は、たくさん声色やモノマネで天気予報したり、声だけでこんなに面白い世界をつくれるんだという、かつて自分がラジオに夢中になっていたころを思い出させてくれます。BUTCH せっかく声がある。声や音楽、音ってすごく大事な要素。ラジオの特性として極めていきたいですね。全国区ではできないことを!

興味を持たれた方は、お手持ちの札を挙げていただければ……と、『スター誕生』のような段取りを予定したんですが(笑)。残念ながら、いずれの方も地元を離れる気はまったくありません。それを押して、無理にプレゼンしていただいたということです。では、なぜ東京に行きたくないのか? 地元を離れたくないのか? 青山さん、そんなに広島が好きですか? 青山 東京でできないことがローカル番組ではできますから。先週末、「広島フッドフェスティバル」というイベントがありました。2日で80万人以上動員するんですが、ここに毎年RCCの「ラジオステーション」をつくって、今年は『歌がうまい選手権』をやったんです。



采野 吉洋 氏(うねの・よしひろ)

1959年滋賀県大津市生まれ。82年南日本放送入社。入社以来、テレビのワイド番組、ラジオのバラエティ番組を中心に担当。50歳になっても相変わらず落ち着きがないワ年少年。ニックネームは「うねちゃん」。

南日本放送 (MBCラジオ) 『うねうねWeekend』

土 11:00～13:30, 14:00～16:35

1999年にスタート。番組のコンセプトは「リスナーとの時間の共有」と「笑う門には福来る」の二つ。毎回テーマを設定し、そのテーマに沿った意見をリクエスト曲とともに紹介。寄せられた意見からニュースにならない地域の様子や生活が見えてくる。今年で丸10年を迎えたMBCラジオ土曜日の看板番組。

なつてしましますし。それを受け入れてくださったということもありますね。

西田 喜瀬さんは、なぜ北海道を離れられないのでしょうか？

喜瀬 39年もマイクに向かうことができたのは、北海道の皆さん方が支持してくださり、私が呼びかけると答えたり参加してくださったからです。北海道はべらぼうに広い。東北6県プラス新潟、あるいはそれ以上の広さです。すべてを知り尽くすなんて不可能だし、まだまだ語り尽くせません。北海道は寒いけれど、東京よりも「温かい」ですから。

西田 お聞きしていると、「東京に夢がある」って簡単には言えなくなりますがね。BUTCHさんは東京でもできますか？

BUTCH 福岡も博多も独特の気質がある。博多だ、東京だ、大阪だってあんまり気にしない。金持ち限定の例ですが、「お腹すいたね、何食う？」となつて、「焼肉いいじゃん」って言ったら、そのまま飛行機で釜山やソウルまで行く。これが博多の人間（笑）。有名人や芸能人が多い。音楽関係者の統計をとると、6割は九州出身という結果もあるとか。「じゃ、ちよい行つてくるわ」って感覚で東京行くし、ダメだったらすぐ戻ってくる。だからあんまり気にしたことはないと思う。地べたに感謝したり、地べたが気持ちよく

ったり。で、いざ「東京じゃなきゃできないときだけ行くべ」ってノリはあるのかもしれない。地域を大切にしている気持ちやリスナーとの距離感の明らかなに東京とは違う。そのあたりを大事にしないと番組として成立しないだろうということは、制作者サイドも持っていると思います。

時間に命を吹き込む仕事

西田 話題を「ポッドキャスト」という世界に移します。

雑誌とラジオ、取り巻く状況は似ているように思えます。出版界で見ますと、書店数が減り続けています。大型書店が増え、書店の総面積は増えている。つまり雑誌を中心にする「町の本屋さん」が減っているのです。一方、ラジオの場合はティーンや中高生のほとんどが受信機を持つていないのではないのでしょうか。

ところが最近、iPod nanoにFMチューナーが入りました。画期的です。皆さんはぜひ力を合わせてアップル社にAMチューナーを入れさせる努力をすべきだと思います。PodでAMが受信できるようになれば、世界は大きく変わる。

さて、雑誌は書店が減っているかわりにコ

ンビニという販路が増えています。コンビニは全国で5万店。ラジオも受信機が減っているかわりに、「ポッドキャスト」という手法が出てきました。

コンビニで売れる本と書店で売れる本には違いがある。コンビニでは表紙だけで掴まなくていけない。ポッドキャストも「いつでも聴けよう」。アーカイブを引き出して聴く。ある意味、ラジオが持つ生放送の共時性を一切なくしてしまうかもしれない。

そこで喜瀬さん、マイクに向かい続けて39年、一生忘れられない生放送がありますか。

喜瀬 あります。ただ、それを録音して「もう一度聴くか」と問われたら、たぶん聴かないでしょうね。

西田 自分の言葉が空中に消えてしまうからこそその生放送ということでしょうか。

喜瀬 それが僕たちの仕事です。残っていないからいいんじゃないでしょうか。「聴いてくださった皆さんの気持ち、心の中には残るけれど、ラジオ放送は形としては残っていないもの。それがいいところだよ」。若いころ、そう言われたことがあります。ただし、例えば、「お勧めの本のコーナー」があったとして、「あのパーソナリティは何を勧めたっけ？」ってポッドキャストのラインナップから確認することはできる。ただし、長

時間のおしゃべりをポッドキャストで聴くことって必要なんだろうか？

西田 BUTCHさんはいかがでしょう。

BUTCH 「ラジオは生だから」というのはそのとおり。もともと役者上がりなので、例えば舞台をDVDにしたときに、まったく違う空気で、あれでライブの世界を捉えることはできない。1回こっきりで終わるからこそその美しさと素晴らしさ。その「時間」というものに僕は命を与え、空間にする仕事をしているんだと思う。

ただ、ポッドキャストにすることで、かつて慣れ親しんだ故郷の様子を、ラジオ局の馴染みある声で思い起こさせてくれる。「こんな話題でいま盛り上がりつつあるんだ」「あそこのおばあちゃん、とうとうラーメン屋やめちゃったんだ」……そんなふうに使ってもらえるとうれしい。

西田 「先週聴き逃した人は、これ聴いておけば今週も楽しめる」という使い方もあるのでは？

BUTCH 作品的につくったコーナーもあるのですが、自分自身で確かめたいときは助かります。「これ、ちよつと詰め甘かったよね」と。それと、小さいころ、眠たくてしょうがないんですけど「深夜放送を意地でも最後まで聴くぞ」ってありませんでした？

西田 「オールナイトニッポン」の（第2部聴いたぜ！）みたいな。

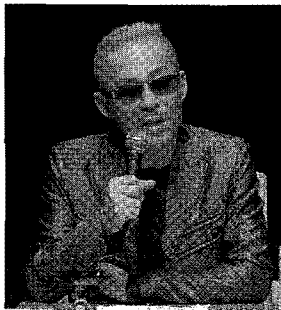
BUTCH ありましたよね。その感覚で若い子たちに聴いてもらいたい。あるいは翌朝の職場での話題づくりの手助けになつてくれるような使い方。

西田 采野さんはポッドキャストをどう思われていますか？

采野 『うねうねWeekend』はポッドキャストをしています。あくまで仮定ですが、前週のコーナーをポッドキャストで聴いて、「おいしそうだね」「じゃ来週聴いてみよう」と。そんな「ティスティング」であれば、可能性はあるのではないのでしょうか。ただ、われわれの仕事は生放送が基本。時間を共有するこ

と。思いを共有すること。同じ時間を過ごしている感覚が一緒になったとき、番組に対する信頼感が寄り添ってくる。

MBCのホームページに桜島のライブ映像が流れています。いまは各地に散らばった鹿児島出身者も、『驚姫』と同様、故郷の象徴を見たい気持ちは強いはず。それに応えたインターネットの効用と同じように、「あの番組、昔聴いてたけど、いまだうなっているんだろ」「まだうねちゃんややってるんだろか？」と思ってくれたり、ポッドキャストの10分間コーナーを聴いてみたら、僕がしゃべっている。「あ、まだやってたんだ」「じゃ、今度帰ったらMBCラジオにチューニングしてみよう」。そう思っていただけ



BUTCH 氏

パーソナリティ、ナレーター。福岡生まれ。愛称ブッチ。演劇の世界を経て、1980年代中ごろからテレビ、ラジオへ出演。現在エフエム福岡では、金曜日の「ブチカン」のほか、月曜・火曜のお昼の人気番組「ラジ★ゴン」に出演中。さまざまなヴォイス・パフォーマンスを駆使して番組を盛り上げる。エフエム福岡のラジオドラマ『聞こえない声〜有罪と無罪〜』で主演を務め、第46回ギャラクシー賞大賞、民放連賞優秀など受賞。

エフエム福岡 『BUTCH COUNTDOWN RADIO』

金 13:30~20:00

超特大バラエティカウントダウン番組！FM FUKUOKAのオフィシャルチャート100曲をオンエア。BUTCH、森本華織、kaede。3人の強烈なキャラクターが際立つ名物コーナーもてんこ盛り！「ブチカン」の愛称で親しまれる、FM FUKUOKAの看板生番組。

のなら素晴らしいですね。テイステイングや懐かしさを思い起こさせるツールとしては意味がある。

ポッドキャストにできること

西田 TBSラジオの『ウィークエンドシャッフル』は、初期からほとんどの番組コンテンツを即時ポッドキャスト化する戦法で認知度を上げ、いまもコーナー丸ごとやっています。ところがあの番組、音楽を楽しむ情報番組なのでDJがいろんな音楽をミックスして流す。しかし、著作権関係の縛りがあるからポッドキャストでは音楽がない。だから聴いていると、すごく物足りない。というより、面白そうなのに聴けない。だからどうしてもホンチャンの放送に行く。縛りを逆手にとった面白い例だなと。

青山 さん、ポッドキャストは「歌がうまい高校生」を全国デビューさせるチャンスかもしれない。高校生の歌もポッドキャストでは流せない？

青山 鼻歌でも、歌詞とメロディがあれば無理です。考えた結果、生放送は生放送、ポッドキャストはポッドキャストということになりました。『秘密の音園』本編とは別物で、ポッドキャスト用に毎回放送終了後に録った

ものを出しています。番組ブログの中にアップしていきまますので、『秘密の音園』というポッドキャスト用のタイトルを付け、パーソナリティも番組スタッフがメインで私はアシスタントにまわった10分間の番組です。週1回アップしています。

西田 感想みたいな形ですね。

青山 番組の裏話、本編ではできないけどやってみたかったコーナーなんです。例えば、『没メールグランプリ』。まったく面白くないメールを読んでみよう（笑）。「だから没になったんだ」を競っていく。あるいは、身内すぎるトークやイベントの裏話などです。

うれしいのは、ヤングがターゲットなので、確実にリスナーが入り替わっていくことですね。彼らはやがて大学に入り広島を出ていく。そんな卒業生リスナーがポッドキャストを聴いて、「懐かしい」と滋賀からメールを送ってくれる。本放送は聴けないけど、ポッドキャストを通じて広島の雰囲気味わってくれるんです。

西田 ポッドキャストは枠がない。でも通常の放送は24時間という制約の中で編成されているから、各局の個性が出る。1時間なら1時間の番組で面白いことをやる。1時間に閉じ込めるからリズムができて、面白さが生まれる。

制約があるから面白い！

西田 ラジオの強さ、あるいは弱いところ、もどかしいところ、足りないところをお聞かせください。

BUTCH 弱さ・強さというより、逆に「そういうもんだから」って全部抱っこしてやるのも、ひとつの手かと。その中でできること、できないことの両面が見えてくるとしても、ものをつくるって、ある意味で枠組みとか制約がないとダメ。制約があればあるほど、面白い番組ができる。恋愛に似てますよね。ラジオという女の子に惚れちゃった人間としては、そのまんま丸ごと愛してあげるしかない。それで意外な可能性が出てきたら、それをさらに伸ばしてあげればいい。

映像がないこと、ライブであること。これが最大の強み。この素晴らしいさをもう一回ブラッシュアップして、ポッドキャストも含めた他メディアとのリンクなどの可能性をいろいろと考える。楽しい宿題がたくさんあると思ってみてはどうでしょう。

喜瀬 「ラジオを活性化するにはどうしたらいいか」って、よくテーマになりますよね。でも、私は十分に活性してると思う。実際、今日も、各地で難しいことにチャレンジして

いる様子に触れることができた。だから、自分たちで枠をはめたり規制する必要はまったくない。ラジオはこれからも無限に広がる。テレビと違って、ラジオは人が見えないのに「人が見える」。ラジオは人が伝わるんです。映像のあるテレビには絶対にできません。

采野 防災に関して圧倒的な強さを発揮します。それと、肉声のメディアだということ。ラジオは「あなた」に語りかけるメディア。肉声で（不特定多数であるけれど）「あなた」に語りかけ、「あなた」が救われることだと思えます。

一方、番組もパーソナリティも浸透して聴かれるようになるまでに時間がかかる。雑誌に例えれば、テレビは表紙。刻々と移り変わ

る表紙で買う。ラジオはずっと聴いていなければ、良さも悪さもわからない。低温やけどみたいに、深く、ぬるいけれども、じわじわ浸透していく。炎ではなく、炭火や置き火みたいなものじゃないでしょうか。

西田 ただ、習慣化したときの強さはテレビの比ではないですね。

采野 ひとつの番組が20年も30年も続くことがあるわけですからね。

青山 ノイズがある。中高生には聴くのに手間がかかることが弱さでしょうか。

「友だちに勧められて、今日初めてこの番組を聴いています、でもコンボにラジオが付いているかどうかラジオのつけ方も分からなくて、説明書を読んでいたら30分かかって、



西田 善太氏(にしだ・ぜんた)

1963年生まれ。87年早稲田大学卒業後、博報堂入社。コピーライター職として勤務。91年マガジンハウス入社。ブルータス編集部を経て、女性誌『ギンザ』創刊、『カーサ ブルータス』創刊にかかわる。カーサ ブルータス編集部では副編集長として創刊から8年間の在籍中、柳宗理特集、安藤忠雄特集などを手がける。2007年12月にブルータス編集長に就任。居住空間学、仏像、お取り寄せ、仕事術、巨人軍特集など、オリジナルなヒット企画を連発。09年2月15日号のラジオ好きの雑誌増巻「ラジオ好きの雑誌増巻」の表紙に登場した。この雑誌は毎月1日・15日発売。



やつとこの放送が流れてきました」。そんなメールが寄せられます。チューナーが付いていても、つけ方が分からない。配信一発でクリアな音声が入る世代です。ノイズ混じりのわれわれの放送をどうしたら受け止め、受け入れてくれるのか。でも、苦労して違和感を覚えながら聴いてくれるからこそ、ラジオで得てほしい。先日家を引っ越した女子高生のリスナーが、「バイトのお金が多かったら、いいアンテナを買います」ってメールをくれました。そのメールで私自身元氣になった。そうやって、人の話を聴いて共有し、空気を感したりすることで元氣になれるメディアです。

西田 私の手がけた『ブルータス』のラジオ特集を10万近いコアなリスナーの方々がお金を出して買ってくれました。

ラジオに限らず、テレビも新聞も雑誌もこれからいろいろ努力をしていかねばならない。しかし、イケイケの時代より、いまのような時代の方が、いつか果実をくれるのではないのでしょうか。ラジオも、とにかく考え続けることではないか。不安がる暇などなく、ああでもないこうでもないといろんな実験をして、そこから何か飛び出すものがあるんじゃないかと思っています。

本日はありがとうございました。